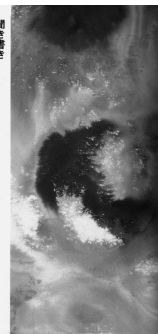


中原澄子『天草へ帰った被爆者』

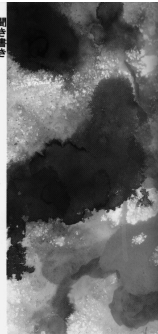
中野 和典

何かを照らし出すためには、距離が必要になる。近すぎれば細部が目立つばかりで、それぞれの関係はとらえにくく、逆に遠すぎれば細部の姿をとらえられず、ついに照らし出すという行為自体の意味や動機を見失ってしまう。これまで親密圏においてしか（あるいは、おいてさえ）語られてこなかった被爆体験に光を当て、公共圏に招き入れようとするとときに問題となるのは、被爆体験と語り手との距離である。ここでは、被爆当時、爆心地からどれだけ離れた地点にいたかという物理的な距離以上に、その後の生活において被爆体験とどのように向い合ってきたかということによって定まる心理的な距離が問題になる。この距離は複雑だ。

被爆から六〇年が経過した分、記憶も遠ざかったかというところ、一概にそうは言えないからである。自身の健康、就職、結婚、出産等において、常に被爆による苦しみから逃れられないという意味においては、六〇年経ったにも関わらず、被爆者は被爆した場所に繰返し引きずり戻されているのだ。しかし、その一方で六〇年経ったために生じている状況にも直面せざるをえない。六〇年の間に、核弾道のネットワークは世界中に張り巡らされ、国際関係を形づくる仕組みの一つとして機能するようになってしまったし、戦争や原爆について語ることも、聞くこともどこか紋切り型（ステレオタイプ）



開巻書
天草へ帰った被爆者
中原澄子



開巻書
天草へ帰った被爆者
中原澄子

で、予定調和的になってしまった。被爆者たちが自分の被爆体験をどのような文脈においてとらえ、どのような立場から語るかといういうことは、容易な問題ではなくなった。このような状況の中、被爆体験と語り手との距離は近くて遠いものにならざるを得ないのである。

中原澄子『天草へ帰った被爆者』（正編・続編）は、そのような距離の複雑さをそのままに受け止め、描き出している。そして二つの特徴によって、その距離（隔たり）を縮めている。一つは聞き手の存在感によって、もう一つは方言という文体によって。

*

被爆体験の聞き書きという手法自体は、特に新しいものとは言えないだろう。しかし、『天草へ帰った被爆者』に特徴的なのは、語り手に耳を傾け、記録する聞き手の存在感が確かな重みを持っていることである。その重みは、聞き手と原爆との関わりによって生まれている。正編巻末に収録の「女学生日記」（中原澄子自身の日記（一九四三年九月〜一九四六年三月））には次のような記述がある。

昭和二十年八月九日 晴天

（略）敵機来襲があつたので冷蔵庫に待避した。大村におちた

という落下傘爆弾の光もわかった。

日記で落下傘爆弾（『原爆』）について触れられているのはこれだけである。しかし、これだけであるということが、後に重要な意味を持つことになる。続編巻末の「おわりに」には次のような記述がある。

あの時十六歳だった私は、天草上島^{かみしま}の志柿の岡の養蚕農家に動員されていて、西の方角に凄惨で不思議に美しい光の広がる地平を見たのですが、そこでどんなことが起こっていたのか知らないまま、戦争の終わりを迎え、これからは夜電灯がつけられるとよろこんでいたのです。

天草へ帰った被爆者たちの聞き書きをすることは、聞き手自身が目にした八月九日の光景（美しい光の広がる地平）にどのような意味があつたのかを追究する行為でもあつたのである。聞き手は、天草から長崎原爆の光を目撃している。しかし、その光の下に出現した被爆地の光景は見えていない。なぜ、原爆の光を見ていながらその惨状を全く知らずに終戦を迎えてしまったのか。情報統制を行なっていた政府や報道機関の在り方に向けられた外側への問いと、何も疑わず平気でいた自分の在り方に向けられた内側への問いが、強烈なものとして聞き手の中にある。聞き書きによって自分の見た光景の意味を問い直し、原爆と自分との距離を縮めようとすると、そのような聞き手自身の物語が重なるため、終始聞き役に徹しているにもかかわらず、全編から聞き手の緊張感がひしひしと伝わってくる。聞き手の確かな存在感は、『天草へ帰った被爆者』の重要な特徴の一つであり、魅力にもなっているのである。

次に、方言（天草のことば）という文体に注目しよう。原爆に

ついて語るときに、被爆体験を公に向けて公の言葉で語ることと、個々の体験の唯一無二性を尊重することとの関わりが一つの問題になるが（本号収録の公開シンポジウムにおいても検討されている）、方言という文体もそれを考える一つの視点になるだろう。柳田国男が方言周圍説^{方言の周囲説}だけでは説明できないと言ったとおり（『蝸牛考』）、方言の多様さは、単一的な法則ではとらえられない。語彙レベルで考えれば、村落ごとに異なるという場合もあるほど細分化していることが方言の特質である。方言はそれぞれの生活の場に根づいている語り口であり、それを使用しない者には分かりづらいが、一方で実感をより印象深く伝えるものでもある。つまり、方言は理解を拒むと同時に実感を伝えるという、二面性を持つ媒体^{メディア}なのである。『天草へ帰った被爆者』の語り手たちの言葉は「天草のことば」とひとくくりにできないほど多様だ。そして、その語り口によって被爆とそれ以後の生活における苦しみ、個別性を失わずに立ち上がってくるのである。

そして何年かしらん髪は生わらんでじゃったでしよう。この道ば通るたんびに、ゲンバク・ゲンバクって男ん子の石ば投ぐつとです。わたしに。何ば被つとつたつちや、みんな知つてもうとつとですけん。髪^{あか}のあつととなかつとのちがいで。ぞろぞろついてくつとですたい。私やこがんして生きとつとよりか死んだ方がまして泣きよつたつです。

（正編・荒木富士子さん）

鹿兒島から嫁に来とつたどが、ニユースか噂かで聞いたつ

でしょう。「原爆におうた者には片輪は生まれんとね。馬鹿は生まれんとね」て言わしたつ。だれが好きこのんで原爆にあうですか。私は、そうにや悔しかつたつ。

(正編・田中ミサエさん)

うちん母たちが、「お前んごたるとば片輪んごたるとば、病人のごたるとば、だいがもろうてくるつか」ちいうてですな。言い方はひどかばつて実際そぎゃんじやつたつですよ。

(続編・中村鶴子さん)

方言で語られている上に、同じ話を繰り返したり、話題が途切れたまましばらく別の話になって、また戻つたりというところも多いため、整然とした明解な語り口ではない。しかし、その分かりにくさが、語り手それぞれの生活に根づいた個別的な実感を伝えているのである。

方言に関してもう一つ印象的なのは、敬語表現である。この点については(天草ことばは敬語表現の多い長崎のことばに近く優しいひびきを持っています)(正編・「あとがき」という聞き手の指摘にある通りである。例えば次のような場面がある。

継母は妹がさがしとつとです。妹が寝られんちゆうてですな。

妹は元気がでしよ。だ^(ん)け妹に夢ば見せらし^(られたの)たつとです。私に

やひとつも見せらさんばつて。(正編・荒木富士子さん)

原爆で亡くなった継母が、自分を探させるために妹の夢枕に立ち

なされた、という部分である。このような敬語表現は、身内にだけ向けられるのではない。次のような場面もある。

そいでやつぱり、「お母さん」ていうですもんな。もう死ぬ間際は、「お母さん早く来てよ」て言うて手ば差し出さしたと。そいで「もうすぐ来らすよ」て言うしか方法のなかもんなあ。なぐさめてわかつとつてなあ。そうして、「ごめんね」て言うたら、こくつとならしたつ。わあ、こん人亡くならしたて、死なしたて思うて。そん人の声が今でん。もう覚えとつとですばい。

(続編・島崎国雄さん)

なぜ、このような敬語を折り込んだ語り口が、胸を打つのだろうか。おそらくは、それが、原爆に身体を焼かれ、治療を受けるでもなく、家族に会うでもなく、水すら飲まずに息絶えていった多くの死者へのいたわりを感じさせるからだろう。死者に向けられた敬語。その語り口は、現在も語り手の中で死者の記憶が息づいていることを示している。

このように『天草へ帰った被爆者』は、被爆体験と語り手との距離、語り手と聞き手との距離、原爆と聞き手との距離が重層的に原爆(以後)を照し出し、立体的な言葉を紡ぎ出している。読者も自分の立っている場所と原爆との距離について、改めて考えずにはいられなくなるだろう。

(創言社 正編二〇〇五年四月、続編同年一月 各二〇〇〇円+税)